

II 資料の収集・研究成果の公開

—博物館資源センター—

[概要]

博物館資源センターは、資料の収集・管理と、研究成果公開の場である展示を中心とした、博物館事業を所管している。これらを効率的に運営するため、資料・修復担当者および情報・知財担当者による資料担当者会議、展示担当者による展示担当者会議、ならびにくらしの植物苑運営会議をふまえ、月例の博物館資源センター会議を開催して、実施に当たった。

1. 資料の収集・製作・保存管理

博物館における研究とその成果公開としての展示を行うために、資料の収集と保存管理はきわめて重要な事業である。資料収集は、共同利用性・継続性・柔軟性の3点からなる基本方針に基づいて進めている。以下、2022年度の受け入れ資料の一部についてその概要を述べる。

購入資料としては、題箋の書き込みから米国弁理公使タウンゼント・ハリスが1861年11月、米国海軍関係者に贈呈したと推定される「萬延改正 御江戸大絵図」、生田家の『能道具控』に記載があり、本館所蔵生田コレクション「鼓胴」(H-1796)から分かれたことが確認できる「菊桐紋散蒔絵小鼓胴」、疫病除けや鯰絵等、本館が充実を図ってきた錦絵コレクション(H-22)を補完する「錦絵(「あきれいよけ」等21点)」等、既存の館蔵資料を充実させるものが挙げられる。また昨年度に引き続き、第5・第6展示室リニューアルに向けた関連資料の収集として、会寧に置かれた第19師団隷下の工兵部隊の写真帖「在営記念写真帳1919 会寧工兵第十九大隊(2冊)」、1876年秋の地租改正に反対する集会の議事録「三重県地租改正大会議録」等を購入した。

受贈資料としては、1937年、肥料商などを営んだ豪商に嫁いだ個人が持参した服飾品類「貝塚廣海家伝来服飾資料(一括、計57点)」など、昭和初期の優品の一括品で展示等での活用が期待できるもののほか、第5・第6展示室リニューアルに向けた資料収集として、企画展示「佐倉連隊に見る戦争の時代」(2006年秋開催)の折に借用して出品した資料を含む佐倉連隊関係資料等を収集した。受託資料としては、幕末から近代の旗本家臣の動向を知ることのできる「塩川家文書(15件)」を受け入れた。

また昨年までと同様に「正倉院古文書」のほか、2023年度開催の企画展示「陰陽師とは何者か—うらない、まじない、こよみをつくる—」で展示予定の「簠簋内伝金烏玉兎集」、第4展示室(民俗)の展示資料である「屋久島観光ポスター」「滋賀県日野町商店引札」について複製製作を実施した。

資料の保存管理については、資料保存環境検討委員会の助言の下に、引き続き文化財害虫や温湿度等の調査を進め、環境の改善や対策を検討した。また、館蔵資料の保存状態を点検・記録し、今後の資料保存・修理計画の立案に向けた取り組みとして資料コンディション調査を実施した。劣化が著しい資料で、今後の展示や貸与等で活用が見込まれる「(草篆)千字文」(H-1870)、「簠簋内伝金烏玉兎集」(H-129)、「紅縮緬地観世水竹虫模様絞唐幘」(H-1739-1-2-2-1)等の修復を実施した。

2. 展示活動

歴博は、歴史資料・情報の収集、整理、保存、公開という一連の機能を有する大学共同利用機関であり、特に、研究資源の収集、研究、展示を有機的に関連させる「博物館型研究統合」というスタイルで、研究の成果および情報の発信をおこなっている。展示については、総合展示および企画展示、特集展示、くらしの植物苑における特別企画、人間文化研究機構の基盤機関が連携して展示を企画・実施する連携展示などをその具体的な活動として挙げることができる。

企画展示では、2つの企画展示を開催した。企画展示「加耶—古代東アジアを生きた、ある王国の歴史—」(2022年10月4日～12月11日)は、総合展示第1展示室のテーマ4(倭の登場)・テーマ5(倭の前方後円墳と東アジア)の国際交流に関する内容や、韓国国立中央博物館をはじめとした韓国諸機関との国際交流事業、本館共同研究「古墳時代・三国時代の日朝関係における交渉経路と寄港地に関する日韓共同研究」の成果に基づき、学術交流協定の締結機関である韓国国立中央博物館に資料貸与や展示内容についての全面的な協力を仰いで開催された。古墳時代の倭がもっとも頻繁に交渉を重ねた加耶について、近年の韓国における調査・研究によって明らかになった姿を墳墓や集落から出土した諸資料から提示し、倭との交渉様態を描いた。本企画展示は、九州国立博物館でも巡回開催した

(2023年1月24日～3月19日)。企画展示「いにしえが、好きっ！—近世好古図録の文化誌—」(2023年3月7日～5月7日)は、本館共同研究「『聆涛閣集古帖』の総合資料学的研究」の成果に基づき、江戸後期に編纂された『聆涛閣集古帖』(本館蔵)を中心に、古器物の実物や複製・復元品等、考古資料や文献資料、絵画、美術資料等から立体的に示し、前近代における歴史資料の分類や概念、古器物の情報共有を通じた「知のネットワーク」の実態を展示により描いた。

第3展示室の特集展示では、「『もの』からみる近世」として、岡島冠山訳『通俗忠義水滸伝』の他、『水滸伝』を扱った葛飾北斎ら浮世絵師たちの版本等の展示を通して江戸時代末期の大衆文化における水滸伝ブームの広がりを示した「水滸伝ブームの広がり」(2022年8月3日～9月4日)、男性の装身具である印籠とたばこ入れをとりあげ、都市を中心に華開いた豊かな生活文化の一端を紹介した「印籠とたばこ入れ」(2022年10月25日～12月4日)のほか、本館共同研究「『広橋家旧蔵記録文書典籍類』を素材とする中世公家の家蔵史料群に関する研究」の成果による「中世公家の〈公務〉と生活—広橋家記録の世界—」(2023年3月7日～5月7日)を開催した。このうち「中世公家の〈公務〉と生活」では展示解説の小冊子を作成し、特集展示による成果の発信を強化した。

第4展示室の特集展示では、民俗仮面等の展示を通して、福も疫病や災害等の不幸も、異界から訪れる神霊がもたらすものと信仰されてきた日本諸地域の神霊のイメージと信仰の諸相を示した「来訪神、姿とかたち—福の神も疫神も異界から—」(2023年1月17日～5月14日)を開催した。

くらしの植物苑では特別企画として、例年の4種の植物に関する各展示に新たな視点を加え、「伝統の桜草」(2022年4月12日～5月5日)、「伝統の朝顔」(2022年8月3日～9月4日)、「伝統の古典菊」(2022年11月1日～27日)、「冬の華・サザンカ」(2022年11月29日～2023年1月29日)を開催した。

3. 情報発信

歴博の資料収集方針にもとづき蓄積された資料については、資料調査プロジェクト等により、研究資源として有効利用されるために必要な情報を付与し、館蔵資料データベースとして公開するほか、さらに踏み込んで、より高次の研究情報を付与した目録・図録、あるいはコレクションに特化したデータベースなどの形で公開している。

博物館資源センター長 内田 順子